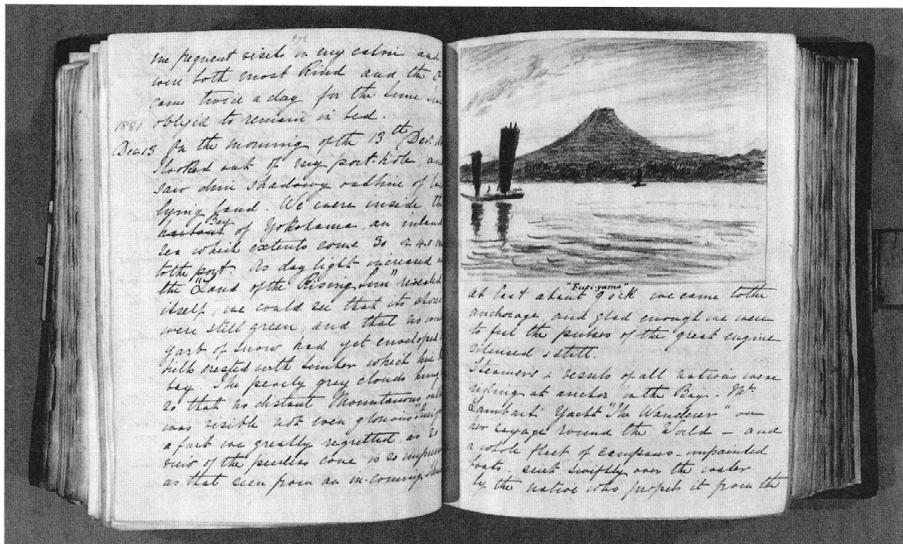


「開港のひろば」

編集・発行／横浜開港資料館（財）横浜開港資料普及協会
発行日／平成8年7月31日（水）

Number
53

横浜市中区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100
印 刷／中川印刷株式会社



1881年から翌年にかけて世界一周旅行をしたイギリス人レイ夫人の日記

日本が開国し、横浜が開港した一九世紀の半ばは、世界的な規模で交通網が整備された時代であった。とくに一八六〇年代の後半になると、太平洋横断航路の開設（一八六七年）、アメリカ大陸横断鉄道の完成（一八六九年）、スエズ運河の開通（一八六九年）などが相次ぎ、交通革命ともいわれる状況を呈した。こうして別の人だけでなく、一般の人にとって世界一周旅行は夢物語ではなくなってきたのであった。

一方、欧米ではすでに旅行が特権階級のものではなく、一般庶民の娯楽となっていた。イギリスでは一八世紀から国内旅行が盛んとなつており、一九世紀半ばには年間一〇万人の人々がヨーロッパ大陸へ出かけようになっていたという（ブレンダン『トマス・クック物語』）。こうした旅行熱と旅行記の氾濫が一九世紀の大きな特徴であった。

なかには何ヵ月、何十ヵ月もかけて世界を旅行してあるく世界漫遊家（グローブ・トロター）と呼ばれるような人々も現われ、明治の新時代をむかえたばかりの日本にも姿をみせるようになった。ヨコハマは、こうした汽船と汽車の時代の旅行者がまず第一步を踏み出す地であり、また別れのサヨナラをいう港でもあつた。



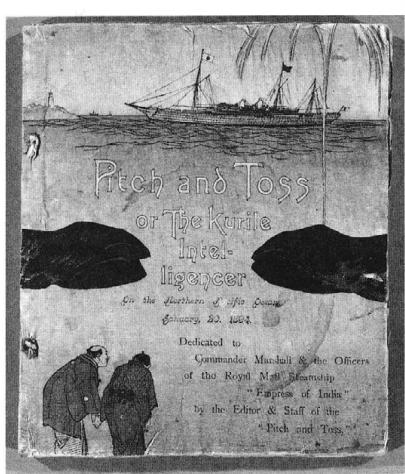
レイ夫人の日記に貼付されたチャールズ・ワーグマンのスケッチ。横浜滞在中にワーグマンのアトリエを訪ねている。

企画展「世界漫遊家たちのニッポン」

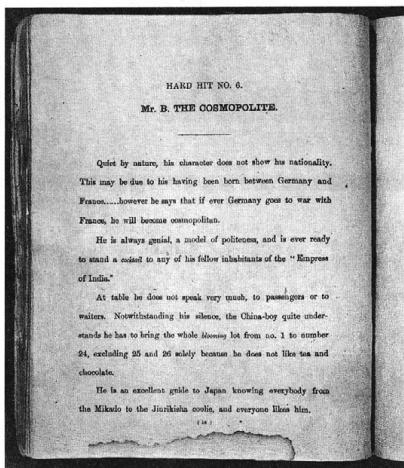
かれらの旅程は、現代人、とくに日本人には信じがたいほどつたりとしていた。日記や手紙にペンをはしらせ、絵心のある人は絵筆をとった。そうした手紙や日誌をもとに、帰國後の土産話が「もつときちんとした形」の旅行記にまとめられることも珍しいことではなかった。もちろん書くことを目的とした作家やジャーナリストたちもいた。こうしておびただしい数の旅行記が書かれ、出版された。旅行記の著者たちは老若男女さまざま、職業も多岐にわたり。今回の展示はこうした日記と旅行記、それにガイドブックが主人である。（伊藤久子）

「世界漫遊家たちのニッポン」から

船旅の記念『ピッチ&トス』



『ピッチ&トス』の表紙



「コスマポリタンのB氏」の記事

箱根旅行

箱根は横浜居留地の外国人ばかりでなく、日本旅行中の欧米人にも人気のある“遠足地”だった。横浜を訪れた外国人旅行客は（横浜を通らない旅行客はほとんどなかつたが）、必ずといってよいほど箱根や鎌倉にでかけていった。

条約改正以前の、「内地旅行免状」がないと遊歩区域外に旅行できなかつた時代でも、鎌倉は自由に行くことができる遊歩区域内だつたし、箱根は、外務省の「内地旅行免状」を申

横断して日本につくまで、汽船でおよそ二～三週間を要した。その間、島影ひとつみえず、大海原に水平線を見るのみという日々がつづく。西海岸へ向かっていく汽船とすれちがえばちょっととした騒ぎで、ボートをおろして乗客の郵便を交換し、情報を伝えあい、また別れていく。運が（あるいは季節が）悪ければ、台風や嵐に見舞われた。

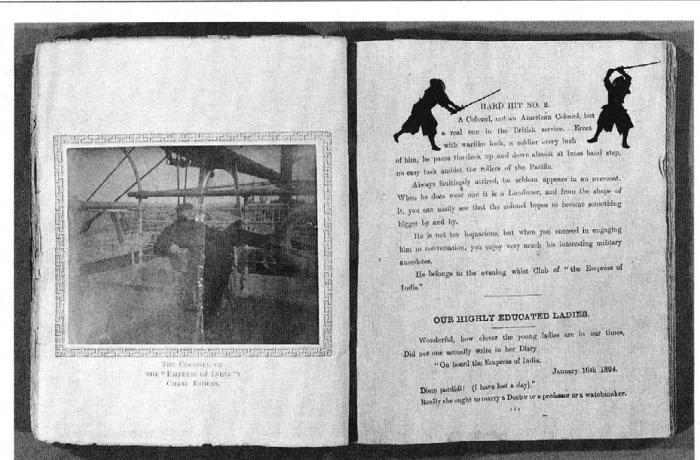
こうした单调な船旅の無聊を慰めるため、一等船客のためにはコンサートが開かれ、ゲームが行なわれ、新聞が発行されたりした。一八九四年（明治二十七）一月八日にヴァンクーブル・ブレス・オヴ・インディア号では、乗務員が『ピッチ&トス』という新

聞（手書きの壁新聞のようなもの）を出していた。写真にあるのは、それを後に編集して東京の長谷川武次郎が出版したもの。長谷川武次郎といえども、いちめん本で有名だが、これもありめん本で、写真をそのまま貼付した頁もある。一等船客などに乗船記念に配られたものではないだろうか。

興味深いのは、一等船客名簿にブルーム夫妻の名がみえることである。ブルーム夫人はなぞなぞ遊びに興じているし、船客評欄の「コスマポリタンのB氏」はブルーム氏とみて間違いないさそうだ。「ドイツとフランスの間で生まれ、いつも物静かで、温和で、丁寧。日本についてのすばらしい案内人で、ミカドからジンリキシャの車夫まで知つており、誰もに好かれている……」——当館ブルーム・コレクションの旧蔵者ボーリー・ブルーム氏の父アンリ・ブルー

ムのほかに誰が考えられるだろうか。

アンリ・ブルームはアルザスに生まれ、一八七八年に来日して横浜の商館に勤め、一八九四年頃にアメリカ人ローズ・アイザックスと結婚したことがわかっている。二人はフランスからアメリカで結婚式をあげ、この船で横浜へ帰ってきたのではないか。この本がブルーム・コレクションに残っているのは大きいに意味のあることだった。



左頁には写真がそのまま貼ってある。

請しなくとも、神奈川県から「外国人湯治免状」を交付してもらえば行くことができた。旅行記の多くにこうした横浜からの遠出についての記述がある。

一八九五年（明治二八）八月、ド・ラ・ポー夫人なる旅行者がエンプレス・オヴ・ジャパンで横浜に着いたが、夫人は「ジャパン」という美

ろに宮ノ下の富士屋ホテルの名前があった。

富士屋ホテルには一八八五年からのレジスター・ブック（宿帳）が残されていて、それを調べると夫妻がやはり一〇月に同ホテルに一週間ほど滞在していることがわかった。住所はリーランドと読めるようだが、そうするとアメリカ人であろう。アメリカから西廻りで世界一周旅行の夫婦だったのではないだろうか。

ちなみに当館では、富士屋ホテルのご好意により、現存しているレジスター・ブックのうち、一九一三年までを複写させていただき、閲覧に供している。外国人旅行者に関する貴重な資料である。

箱根などの観光地には、その地域だけのガイドブックも出版された。写真の『箱根ガイド』は、一八九八年に静岡県三島のツチヤ・チジューという人物が、箱根の遠州屋ホテルの主人松井氏に請われて彼の原稿を英訳したもので、箱根の地理、気候、温泉、歴史などに、簡単な旅行案内を加えた小冊子である。その表紙の見返しに鉛筆書きで、「宮ノ下から熱海に行く途中、箱根をチエアで通った際に購入。一九〇三年五月二九日。（すばらしい旅行！）バートン」と

のレジスター・ブックをみると、五月二八日到着翌五月一九日出発のバートン夫妻の名が見える。アメリカ人でフィラデルフィアの人であることがわかった。この夫妻も世界漫遊中だった可能性は大きい。

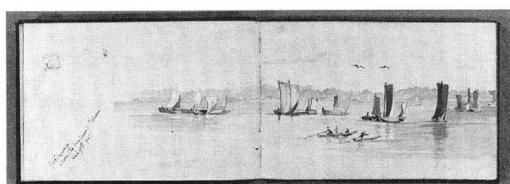
ブルースター氏のスクラップブック

旅行記を書かなくてもスクラップブックを残した人もいる。当館所蔵のW・ブルースター氏のスクラップブックは貼り込みがかなり順不同で、あまり几帳面ではない性格をうかがわせるが、日本には一九〇一年（明治三四）の三月に長崎に着き五月三日に横浜からヴァンクーバーに出航している。約二ヶ月の日本旅行であり、その間の記念写真、レシート、メニューや横浜ユナイテッド・ホテルのビジター会員証などがある。富士屋ホテルの朝食の請求書があるの

が貼つてあるところをみると、やはり世界一周の旅だったのだろう。横浜の本町通一丁目の椎野賢三のシルク・ストアの領収書もある。一九〇一年四月二二日、絹の着物一枚とクッション・カバー四枚（仕立て）の買物をしている。横浜はキュリオ・ショップ（美術工芸品店、骨董品店）、シルク・ストア、写真館など日本本土産の店が立ち並び、旅行客があちこちの店で金と時間を費やした街でもあった。（伊藤久子）



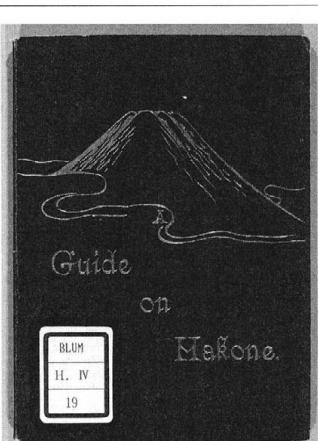
椎野賢三店の領収書



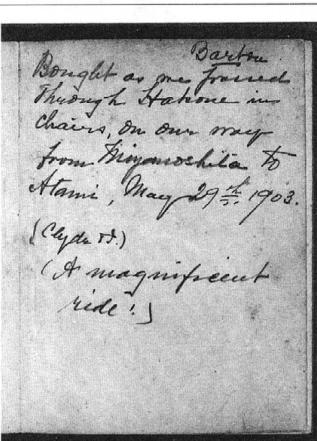
ド・ラ・ポー夫人が船上から描いた横浜（水彩画）

しい水彩画のスケッチブックを残している。スケッチの場所と日付をたどっていくと、夫妻は、日光、箱根、名古屋、京都、神戸、瀬戸内海を経て一月末に長崎を出航するまで約三ヶ月の日本旅行を楽しんでいる。この旅行者についてもう少し手がかりはないかと探してみると、箱根のところ

スケッチの場所と日付をたどっていくと、夫妻は、日光、箱根、名古屋、京都、神戸、瀬戸内海を経て一月末に長崎を出航するまで約三ヶ月の日本旅行を楽しんでいる。この



箱根のガイドブック



表紙の見返しの書き込み

横浜家具を創った人びと

本年一月三一日から四月二四日まで開催された「横浜家具を創った人びと」展の会期中、多くの方々から種々なるご教示や貴重な資料の提供を受けることができた。本誌を借りてお礼申し上げるとともに、ここに誌上において追加展示させていただくことにする。

写真1は、元町三丁目一二七番地に所在した関野作次郎家具店の店頭



写真1



写真2

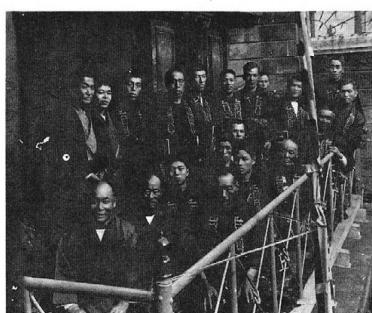


写真4



写真6

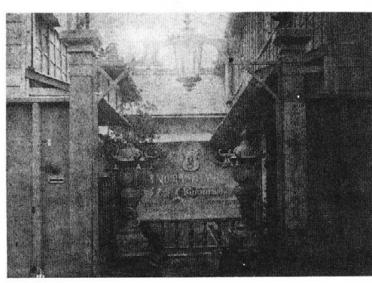


写真7

とあるが、英文表示には HOUSE-HOLD FURNITURE & COOKING UTENSILS ETC とあるように、店頭の商品には調理用品や食器類が多い。営業の主力を食器類に移していくのであろうか。右手の柱の前にはアイスクリーム製造器が積まれ、その奥に冷蔵庫が置かれている。関野家具店は四丁目にも店舗を有しているようなので西洋家具の陳列場はそちらにあつたのかもしれない。左端

大正・昭和にわたる元町旦那衆の風貌風采の移り変わりがうかがえて興味深い。

写真4は、明治期と推測されるが、何かの折りであろう、田辺商店店員たちの記念写真。元町五丁目二〇一番地の店舗二階であろうか。ハッピ

大五郎のひ孫にあたる昌男（東京都世田谷区在住）・文男（金沢区在住）・弘（茅ヶ崎市在住）の三兄弟より提供を受けたものである。明治・

第五一号「彫刻家具の四大王」で紹介しておきながら、唯一一人、面を割ることのできなかつた人物である。キッカケは意外と近くにあつた。今回展示の企画協力者でもある「横浜家具を通して文化を考える会」の副会長鈴木智恵子氏のかつての勤め先の同僚に沼島治郎兵衛の子孫がいたのである。東京田無市在住の沼島

である。作次郎のひ孫にあたる関野保彦氏（綾瀬市在住）の御所蔵になるものである。「西洋家具商関野商店」は明治三年（一八九九年）の創業とされる。左から二番目の少年（制帽は元街小学校のもの）であろうかが明治四十一年生まれということができる。年格好から推測して大正初頭の光景になろう。

店構は塗屋造りで、間口は五間位であろうか。看板に、「西洋家具商」

草分け（明治五年の創業とされる）にして大店「田辺商店」の三代、大五郎・確造・太一郎の肖像で、初代内田町六丁目二五・二六番地（現み

の曲木椅子の上には枕らしきものが置かれている。その奥の棚に陳列されているのはカーテン地かカーペット類であろう。いずれにしろ、関東大震災前の元町家具商の店内の様子のわかる写真として大変貴重である。

に Tanabe と横文字を入れているところがいかにも元町らしい。店員たちはいえ、重ね着の下のハッピに「大定」などの屋号のみえることから、田辺商店出入りの職方たち、木地師や塗師たちも含まれているようである。

寛美氏は、関西在住の沼島本家筋に展示紹介の労をとつてくださり、治郎兵衛の孫にあたる重田久里子氏が神戸から来館され、重田氏の仲介により、治郎兵衛直系の沼島専也氏（守口市在住）から六葉の治郎兵衛関係写真の寄贈をいただくことになった次第である。捜し求めていた「彫刻家具の創始者」を追加展示することができたのは、展示の閉幕四日前のことであった。

（堀勇良）

大正・昭和期 資料調査

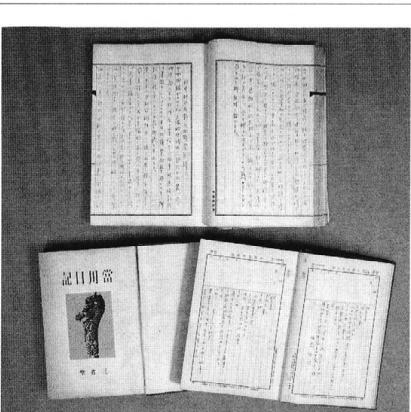
横浜開港資料館は、設立準備段階から今日にいたるまで、市内の諸家に残る歴史資料を調査し、目録を作成する仕事を続けてきた。整理された資料の中には、マイクロ・フィルム撮影・複製化されて閲覧に供しているものもあれば、所蔵者ご好意により、横浜市に寄贈・寄託され、当館の閲覧・展示に活用させていただいているものもある。

これまでの経験を基礎として当館

に墨で文字が書かれ、骨董的価値がある。前近代の文書は、ほとんどが和紙である。

横浜開港資料館は、設立準備段階から今日にいたるまで、市内の諸家に残る歴史資料を調査し、目録を作成する仕事を続けてきた。整理された資料の中には、マイクロ・フィルム撮影・複製化されて閲覧に供しているものもあれば、所蔵者ご好意により、横浜市に寄贈・寄託され、当館の閲覧・展示に活用させていただいているものもある。

これまでの経験を基礎として当館



新しく発見された資料の一部。戸塚町長内田隆三の講演草稿を綴った「雑記控」(上)と、昭和9年・15年の日記(戸塚区戸塚内田泰三家寄贈文書)

では、昨平成七年度から、特別事業として横浜市内の大正・昭和期を中心とする資料調査に取り組んでいる。平成七年は戦後五〇年に位置し、昭和のはじまりから七〇年、大正のはじまりから八五年である。「明治は遠くなりにけり」どころか、大正・昭和も遠い歴史となりつつあるのである。

前近代の文書は、ほとんどが和紙

情から、膨大な量の近現代資料は、後日の整理として一括された例も少なくない。そのような事から、近現代資料はとかく所蔵者からなおざりにされがちで、かなならずしもきちんと整理・確認されていなのが実情である。

ところで大正・昭和期の特徴として、多くの地域団体が発生することが指摘できる。日本

社会の結びつきが弛緩すると、方面委員・衛生組合・在郷軍人会・青年団・防護団・町内会・産業組合など、新たな組織が地域運営を担うよう創設される。そのため、江戸時代からの有力者たる名望家が、さらに多くの社会層がこれら組織に参加することとなり、いわゆる「中間層」が重きをしめるようになる。

本の急速な近代化とともに、地域社会の結びつきが弛緩すると、方面委員・衛生組合・在郷軍人会・青年団・防護団・町内会・産業組合など、新たな組織が地域運営を担うよう創設される。そのため、江戸時代からの有力者たる名望家が、さらに多くの社会層がこれら組織に参加することとなり、いわゆる「中間層」が重きをしめるようになる。

認知されている。しかし、明治以降とくに大正期以降の資料は多様で、「ガリ版」と称された孔版印刷や活版印刷、ペン・鉛筆などの簡便な道具での記録など、ここ二〇年のコピー機やワープロが普及する以前と基本的に変わらぬ手法で作成されているものがほとんどであるため、骨董的価値はほとんど認められていない。

また戦後の地域の資料調査を、近世史研究者が主に担ってきたという事

に住む者が含まれる。また戦後の都市化のなかで転居を余儀なくされる場合も少なくない。しかし資料の残存を絶望視することはできないし、大正・昭和期を解明するうえで重要な研究対象でもある。

「中間層」を析出する方法として、われわれは以下の方法をとった。先にあげた方面委員・衛生組合・在郷軍人会等の役員名簿(戦前期の「区勢要覧」などに掲載)などに示された人名情報をパソコンに入力し、そ

の者たちを戦前期の電話帳から拾いだし職業・住所を追加入力してゆく。以上の作業を通じて「調査対象者リスト」ができる。「調査対象者リスト」には江戸時代よりの名望家の家

に「中産階級」の語に置き換える

ものを指していない。社会秩序を底辺から支える主体としての社会層

を「中間層」として考えている。具体的な職業としては、銀行や有名企業のホワイット・カラード、小売商、宗教家や医者や公務員などが想定されるが、そのようななかには、資料を保管する機能が乏しい一般の住宅に住む者が含まれる。また戦後の都

市化のなかで転居を余儀なくされる場合も少なくない。しかし資料の残存を絶望視することはできないし、大正・昭和期の資料が大量に発掘され、資料整理作業の過半は、旧名望家の家の未整理資料にあてられることとなつた。したがってリストに膨大に登場する、旧「中間層」の資料発掘・整理は今後の課題として残ってしまったのが実情である。それでも多くの新しい資料の発掘があり、名望家の家と「中間層」にねらいを定めた調査は、両輪の輪のように双方等しく行なつてゆく必要を痛感した。

平成七年度の資料整理実績として、市内の諸家・神社・事業所などは、市内の諸家・神社・事業所など一五件、計五、一〇九点にのぼった。資料発掘の常として、大正・昭和期の資料以外に、江戸時代の文書も少なからず発見されており、あわせて目録化をはかっている。資料所蔵者のなかには、旧い住宅の建替えを契機に資料を提供された方や、事業の閉鎖・組織の解散とともに事務所に残った資料を提供された組合関係者がいた。かかる事情を考えると、資料の受皿としての今回の整理事業が果たす役割は大きいものと思う。これら資料の閲覧・公開はなお少しの時間を要するが、さらに多くの方々の資料提供を望む次第である。

ここでいう「中間層」は、ただちに「中産階級」の語に置き換えられるのを指していない。社会秩序をして活動している者が大枠で「中間層」としてとらえられよう。

しかし実際には、平成七年度には、江戸時代の村役人として伝來した文書を有する家から、さらに大正・昭和期の資料が大量に発掘され、資料整理作業の過半は、旧名望家の家の未整理資料にあてられることとなつた。したがってリストに膨大に登場する、旧「中間層」の資料発掘・整理は今後の課題として残ってしまったのが実情である。それでも多くの新しい資料の発掘があり、名望家の家と「中間層」にねらいを定めた調査は、両輪の輪のように双方等しく行なつてゆく必要を痛感した。

平成七年度の資料整理実績として、市内の諸家・神社・事業所などは、市内の諸家・神社・事業所など一五件、計五、一〇九点にのぼった。資料発掘の常として、大正・昭和期の資料以外に、江戸時代の文書も少なからず発見されており、あわせて目録化をはかっている。資料所蔵者のなかには、旧い住宅の建替えを契機に資料を提供された組合関係者がいた。かかる事情を考えると、資料の受皿としての今回の整理事業が果たす役割は大きいものと思う。これら資料の閲覧・公開はなお少しの時間を要するが、さらに多くの方々の資料提供を望む次第である。

長崎版画と横浜浮世絵

本誌前号「開国・開港のシナリオ」では、「異國渡来年代誌」という史料を紹介しつつ、「開港は日本の繁栄を慕つてやつてきた諸外国に対しても、『御心』から願いを特別に許したもので、しかも交易によって日本はますます繁栄するだろう」といふのが、幕府公認のシナリオであり、横浜浮世絵の出版理念に他ならない。横浜浮世絵も現実をそのまま写生という仮説を提出した。いうまでもなくこのシナリオは虚構であつて、これをビジュアルに表現してみせたものではなかつた。

横田洋一氏は「横浜浮世絵とその時代」(『集大成横浜浮世絵』、神奈川県立博物館編、有隣堂刊、一九七九年)所収)で、横浜浮世絵が「参考、あるいは引用したもの」として、既刊の版本などからの引用、②長崎版画の影響、③外国の新聞などの挿絵の利用、の三点を挙げ、③について具体的例を紹介している。①については、鈴木重三氏が「前期横浜浮世絵にみる異人風俗画」(同前)で具体的例を紹介している。しかし、②については、なお論すべきことが多くあるよう思われる。

長崎版画とは、「八世紀中頃から長崎を訪れる人びとに對する土産物として、おもにオランダ(紅毛)と中国(唐)の船や人物・風俗を主題とし、異国趣味をセールス・ポイントに地元で製作・販売された版画のことである。鎖国時代の長崎は日本唯一の國際貿易港であり、その利益

は貿易に從事する商人や通辞、関税收入を得る幕府のみならず、地下銀としてすべての町民に分配されていた。小野忠重氏の巧みな表現を借りるならば、長崎版画の主役となつたオランダ人や中国人は「貿易收入でうるおう長崎市民の歳徳神・招福神・財神」に他ならず(『長崎絵』、『長崎古版画』、野々上慶一編著、三彩社、一九七〇年)所収)、表情や姿態がいかにも愛らしく描かれているのはそのためであろう。そのことが素朴な筆致や色合いとあいまって、今日なお多くの愛好家を引きつける魅力の一つとなつてゐる。

港に繁栄をもたらす外国人を描いて来訪者への土産物とするという基本的な性格において、横浜浮世絵は長崎版画と軌を一にしており、江戸錦絵の技術の基礎の上に、その性格を継承したものである。万延元年(一八六〇)から翌文久元年にかけて、横浜浮世絵が量産されるのと反比例して、長崎版画が急速に衰退に向かつたのもそのためである。いわば御株を奪われてしまつたのである。

長崎版画と開国・開港期の瓦版

江戸の版元が長崎版画に注目したのは、黒船渡来に際して大量に瓦版が出版された時にさかのぼると思われる。そこに描かれた黒船がじつは長崎版画のオランダ船の模写であつたことについては、「長崎から来た黒船—開国期瓦版の海外情報」(横浜開港資料館発行『たまくす』四号)

一九八六年)という小文ですでに述べたので、ここでは繰り返さない。

横浜開港を予告する瓦版にも、港内にお長崎版画風のオランダ船が描かれており、また遊廓の開業を予告する瓦版には長崎丸山そつくりの山正うつし神奈川横はまるくハあげやの図」という言い訳めいた文言が添えられている。

さらに二つの例を紹介しておこう。

一つは「清朝南京人太祖祭之図」と題するもので、「八月中旬神奈川横浜において南京人太祖祭といへることをなしたり」に始まる文章とともに、本牧に上陸した中国人の行列が描かれている。しかしその絵は豊島屋文治右衛門板の有名な長崎版画『唐人屋舗景』に描きこまれた天后聖母(航海安全の女神)船揚がり(船から唐人屋敷内の天后宮に移すこと)の行列を、多少順序を変えて写したものである。同様に安政六年(一八五九年)横浜に上陸したという「魯西亞人上陸音楽之図」も「紅毛人道中ハヤシ方行列之図」に基づくもので、ロシア使節レザノフ来航時の長崎版画に源流をもつ図柄である。これらは文章ともども虚構にすぎない。しかし、横浜浮世絵の露払いの役割を果たしたものとして注目される。

横浜浮世絵に描かれた

ブロムホフの家族

亨貞秀による長崎版画からの直接的な引用の事実を立証してみよう。

ナポレオン戦争中、オランダは本国をフランスにバタヴィア植民地をイギリスに占領され、国旗の翻るのは長崎出島のみという苦境に立たされたが、ウイーン会議によって主權を回復し、文化一四年(一八一七年)新任の商館長としてブロムホフを長崎に派遣した。その際彼は病後ということと生後一六ヶ月の男児がいるという理由で妻や乳母を同伴した。商館員時代からの旧知の間柄だった奉行所の役人や通辞達はこれに同情し、妻子の出島への上陸を許すとともに、幕府に「在留願書」を提出した。これに添えられた通辞の私信には次のように記されていた。

「いづれも稀なる美女に御座候處、就中うば一八九歳に成り候よし、別して美しき事類なき美女に御座候。」(乳母の名は日本側の記録によると、「ふれとろねるらみゆるつ」といった。)

しかし幕府の許可は下りず、家族はバタヴィアへ帰帆する船に乗つてブロムホフと別れ、長崎を後にしなければならなかつた。出島に滞在中の家族は、シーボルトの協力者としても知られる川原慶賀らの絵師によつて描かれ、それを原画とする大和屋板の長崎版画(図①)はロングセラーとなつた(中山千代「ブロムホフ夫人哀話」『日蘭交流の歴史を歩く』(KLMオランダ航空編、NTT出版、一九九四年)所収)。

次に横浜浮世絵の第一人者、五雲

6

図②は貞秀の「阿蘭陀婦人挙觴愛児童之図」と題する横浜浮世絵である。

これを図①と対照してみよう。①では夫人が椅子に坐り、その前に乳母が男児を抱いて立っている。

②では両者の関係が逆になっているが、右手の女性は同じグラスを持ち、首飾りが衿飾りになっているものの、

襟元や裾のレース飾りは同じである。

そして二人の間には同じ形のビンが描かれている。左手の女性もリボンや胸元が同じである。しかし、長崎版画が「別して美しき事類なき美女」とされた乳母と「見事成事筆紙に尽し難し」とされた衣裳を強調する構

図なのに対し、横浜浮世絵では、坐っている乳母が立っている夫人に酌をするという不自然な構図になつていて。主題を消化・吸収したうえで借用するというのではなく、ほとんど剽窃・盗作に近い引用をしたため、貞秀らしからぬ失態を演ずる羽目に陥っている。

これほどあからさまな例は珍しい

が、長キセルを持つたり、懷中時計を取り出したり、遠眼鏡で港の彼方を見たりするオランダ人や、背後から傘を差しかける従者の形象はいずれも長崎版画からの借用と見てよい。横浜浮世絵を持つ外国人の像は、長崎版画を持つオランダ人の像の画想の借用である。

中國人像をめぐって
—長崎版画と横浜浮世絵の相違—

今度は図③と④を対照していただきたい。図④が、図③の筆を持つ人とこれを見る人の前後左右の関係を逆転し、しかも中国人を紅毛人に、毛筆を羽ペンに換えたものであることは明らかであろう。しかし、なぜ長崎にあって中国人はオランダ人を越える貿易量を誇り、滞在者の数も多く、その主体は商人であつて、中には僧侶や文人などの知識人も含まれていた。長崎版画の中の中国人はいずれも帽子をかぶり、表情は微

笑ましくなるほど柔軟か聰明であり、女性は美しく、子供は愛らしく描かれている。書や読書をたしなんだり、花鳥風月を愛でるなど、文人・風流人は、無帽で弁髪を強調したものとして描かれる例も多い。

が、長キセルを持つたり、懷中時計を取り出したり、遠眼鏡で港の彼方を見たりするオランダ人や、背後から傘を差しかける従者の形象はいずれも長崎版画からの借用と見てよい。横浜浮世絵を持つ外国人の像は、長崎版画を持つオランダ人の像の画想の借用である。

中國人像をめぐって
—長崎版画と横浜浮世絵の相違—

今度は図③と④を対照していただきたい。図④が、図③の筆を持つ人とこれを見る人の前後左右の関係を逆転し、しかも中国人を紅毛人に、毛筆を羽ペンに換えたものであることは明らかであろう。しかし、なぜ長崎にあって中国人はオランダ人を越える貿易量を誇り、滞在者の数も多く、その主体は商人であつて、中には僧侶や文人などの知識人も含まれていた。長崎版画の中の中国人はいずれも帽子をかぶり、表情は微

笑ましくなるほど柔軟か聰明であり、女性は美しく、子供は愛らしく描かれている。書や読書をたしなんだり、花鳥風月を愛でるなど、文人・風流人は、無帽で弁髪を強調したものとして描かれる例も多い。

しかし、横浜浮世絵に描かれる中国人は、無帽で弁髪を強調したものとして描かれる例も多い。

中国人像をめぐって
—長崎版画と横浜浮世絵の相違—

今度は図③と④を対照していただきたい。図④が、図③の筆を持つ人とこれを見る人の前後左右の関係を逆転し、しかも中国人を紅毛人に、毛筆を羽ペンに換えたものであることは明らかであろう。しかし、なぜ長崎にあって中国人はオランダ人を越える貿易量を誇り、滞在者の数も多く、その主体は商人であつて、中には僧侶や文人などの知識人も含まれていた。長崎版画の中の中国人はいずれも帽子をかぶり、表情は微

笑ましくなるほど柔軟か聰明であり、女性は美しく、子供は愛らしく描かれている。書や読書をたしなんだり、花鳥風月を愛でるなど、文人・風流人は、無帽で弁髪を強調したものとして描かれる例も多い。

しかし、横浜浮世絵に描かれる中国人は、無帽で弁髪を強調したものとして描かれる例も多い。

中国人像をめぐって
—長崎版画と横浜浮世絵の相違—

今度は図③と④を対照していただきたい。図④が、図③の筆を持つ人とこれを見る人の前後左右の関係を逆転し、しかも中国人を紅毛人に、毛筆を羽ペンに換えたものであることは明らかであろう。しかし、なぜ長崎にあって中国人はオランダ人を越える貿易量を誇り、滞在者の数も多く、その主体は商人であつて、中には僧侶や文人などの知識人も含まれていた。長崎版画の中の中国人はいずれも帽子をかぶり、表情は微

笑ましくなるほど柔軟か聰明であり、女性は美しく、子供は愛らしく描かれている。書や読書をたしなんだり、花鳥風月を愛でるなど、文人・風流人は、無帽で弁髪を強調したものとして描かれる例も多い。

しかし、横浜浮世絵に描かれる中国人は、無帽で弁髪を強調したものとして描かれる例も多い。

中国人像をめぐって
—長崎版画と横浜浮世絵の相違—

今度は図③と④を対照していただきたい。図④が、図③の筆を持つ人とこれを見る人の前後左右の関係を逆転し、しかも中国人を紅毛人に、毛筆を羽ペンに換えたものであることは明らかであろう。しかし、なぜ長崎にあって中国人はオランダ人を越える貿易量を誇り、滞在者の数も多く、その主体は商人であつて、中には僧侶や文人などの知識人も含まれていた。長崎版画の中の中国人はいずれも帽子をかぶり、表情は微



①阿蘭陀婦人の図 永見徳太郎『続長崎版画集』(夏江堂)一九二六年(大正十五年)より



②生写異国人物 阿蘭陀婦人の挙觴愛兒童之図 万延元年(八六〇)一月。当館蔵コレクション



③清人書房図 永見徳太郎『続長崎版画集』(夏江堂)一九二六年(大正十五年)より



④横浜商家紅毛人書認之図 文久元年(一八六一)一月。当館蔵

貞秀が長崎版画を剽窃しつつも改竄したことのうちに、長崎と横浜での中国人の位置や役割の相違が期せずして表現されているわけである。

以上は横浜浮世絵に対する史料批判の一端である。写実をもつて知られる貞秀ですら、外国人の俗や風物を描くにあたっては、長崎版画の引用から始める他なかった。これに外国の新聞挿絵などの材料が加わり、その後のようやく写生の段階に移行する。その成果が『横浜開港見聞誌』に結実するわけだが、写生の段階に至つてもなお長崎版画は現実を見る際のフィルターとして機能していたのではないだろうか。描かれた画像が虚構か真実かという問題もさることながら、ここには、長崎を通じて世界を見るという間接的な認識のありかたから、直接に世界を認識する段階への移行、換言すれば精神の次元での鎖国から開国への轉換という、今日想像する以上に困難であった過程が存在する。横浜浮世絵の史料批判を通じてこの過程を解明することができるならば、消極的に見える史料批判が実は多産であることの例証をも提供することができよう。

(斎藤多喜夫)

閲覧室から

横浜開港資料館所蔵
聖書資料(2)

トモド、トモ、ビレモんにおくれる
セイハのふみ
〔ラウハ訳〕 横浜 (AM. and Foreign Bible Society) 明治11(1878)年1月 18号 一冊 (48P)

加拉太書 新約聖書
翻訳委員社中訳 横浜 北英國聖書

会社 明治10(1877)年 和装

装 22cm 一冊 (16丁) 書名は題簽・
簽・見返による [193.7.7]

[193.7.7]

使徒行伝 新約聖書
翻訳委員社中訳 横浜 米国聖書会

社 明治10(1877)年 和装

装 22cm 一冊 (13丁) 書名は題簽・
見返による [193.6.3]

[193.6.3]

馬太伝 新約聖書
翻訳委員社中訳 横浜 北英國聖書

会社 明治10(1877)年 和装

装 22cm 一冊 (95丁) 書名は題簽・
簽による [岡一和本-32]

[193.6.4]

馬太伝 新約聖書
翻訳委員社中訳 横浜 米国聖書会

会社 明治10(1877)年 和装

装 22cm 一冊 (95丁) 書名は見返に
よる [193.6.4]

羅馬書 新約聖書
翻訳委員社中訳 横浜 (翻訳委員
社中) 明治10(1877)年 和装

装 22cm 一冊 (41丁) 書名は題簽・
簽・見返による [193.7.8]

新約全書 引照
翻訳委員社中訳 横浜 米国聖書会
社 明治11(1879)年 和装

22cm 一冊 (10・6丁) 書名は題

簽・見返による [193.7.12]

新約全書 引照
翻訳委員社中訳 横浜 明治11
(1880)年 22cm 一冊 (75P)

英文書名 "Reference Testament"

[193.5.1]

羅馬書 新約聖書
翻訳委員社中訳 横浜 北英國聖書
会社 明治10(1877)年 和装

装 22cm 一冊 (41丁) 書名は題

簽・見返による [193.7.9]

印波ねに安良波し太留印計無
〔ラウン記〕 横浜 Mission Press
明治11年(1878)年1月 18号 一冊 (57P)
英文書名 "the Revelation of John" [193.8.1]

[193.8.1]

哥林多前書 新約聖書
翻訳委員社中訳 横浜 米国聖書会

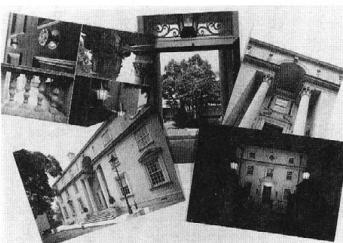
社 明治11(1878)年 和装

装 22cm 一冊 (44丁) 書名は題簽・
見返による [193.7.11-1]

哥林多後書 新約聖書
翻訳委員社中訳 横浜 米国聖書会
社 明治11(1878)年 和装

装 22cm 一冊 (44丁) 書名は題簽・
見返による [193.7.11-2]

資料館だよ



絵はがき「横浜開港資料館・旧館」
昭和6年(1931年)に建てられた元イギリス総領事館。ルネサンス期の様式を取り入れた近代建築の傑作。5枚1組250円 当館・受付で販売。

▼展示

(1)「世界漫遊家たちのニッポン一日記と旅行記とガイドブック」7/31(木)~10/27(日) 19世紀後半は世界一周旅行が盛んとなった時代であり、日本にも多くの旅行者が訪れ、横浜はその中心であった。今回の展示では、おもに英米人の旅行者が著した日記や旅行記を素材に明治の日本、横浜を紹介する。

(2)「石けん工業の創始者一堤磯右衛門の生涯」(仮題) 10/30(木)~2/2(日) 日本で最初に石けん製造に成功したと伝えられる堤磯右衛門の生涯を、子孫の家に残された資料を中心紹介する。

▼講演会

「世界漫遊家たちのニッポン一日記と旅行記とガイドブック」展記念講演会
日時・講師等は未定。詳細は「広報よこはま」9月号に掲載。

▼寄贈資料

(1)復興記念写真帖(昭和4年 横浜市)
ほか 3点(旭区三反田町 清水弘之氏)
(2)沼島治郎兵衛家具製作工場関係写真
6点(守口市本町 沼島専也氏)
(3)日本全国鉄道図(明治43年頃) 1
点(竜ヶ崎市松葉 河本創作氏)

1点(青葉区藤が丘 細淵淳氏)

▼出版物案内

『横浜居留地と異文化交流—19世紀後半の国際都市を読む』(横浜開港資料館・横浜居留地研究会編 山川出版社発行)

A5判 421頁 定価2,900円

横浜開港資料館と協力して研究をすすめている横浜居留地研究会と横浜開港資料館の編集で、横浜の外国人居留地という“窓口”から日本と世界の接点を探ろうとした、合計17編の論文を収録。

当館・受付及び書店で販売。

閲覧室からのお知らせ

閲覧室の図書整理のため、下記の期間閲覧室は休室とします。

平成9年2月25日(火)~28日(金)

また月末整理日のため、下記の日も閲覧室は休室になります。

平成8年7月31日(水)、10月31日(木)、平成9年1月31日(金)

ご理解とご協力を、よろしくお願ひいたします。